式　　辞

一年のうちで最も生命の躍動するときを迎え、本日ここに佐賀星生学園第１回目の
記念すべき入学式を挙行できますことは何よりの喜びでございます。
また、ご多用の中保護者の皆様ご来賓の皆様にご臨席を賜り厚く御礼申し上げます。

ただいま、41 名の新入生の皆さんに佐賀星生学園への入学を許可いたしました。新入生の皆さん入学おめでとうございます。教職員はもとよりこれから皆さんを支援してくださる職員一同、心より皆さんの入学を歓迎いたします。

佐賀星生学園は、一人ひとりの個性を大切にし、意欲や能力を引き出すことを教育の本質としています。私たちは、教育を受ける側にたって構築された学校の実現に向け創意と工夫により絶えず進化を促したいと思います。

本学園は、星が生まれると書いて「星生」（ほっしょう）とよみます。大分県久住にある
星生山のすばらしさに感動して校名をつけました。星生山は「光彩を放つダイヤモンド」と言う異名を持ち、頂上からは３６０度の美しい自然の情景を見ることができる標高 1762 ｍの山です。頂上までは私の足で歩くと片道約２時間半程度。
ただ、星生山への登山道、かなりの高さまでコンクリートの山道が続きます。正直つらいだけの時間が続きます。でも、そのコンクリートの道が終わったあと、風景は一変します。尾根が見えるのでどれだけ登ってきたかがわかるし、春であれば、ミヤマキリシマ、リンドウの花が色づいていて心が温かくなってきます。
そして、汗だくになってたどり着く山頂。これが格別です。夏場であれば、山頂での冷たい飲み物も楽しみです。おなかもすいているのでお弁当も格別のおいしさです。
人生を山に例えて考えてみると、登山と人生には似たようなところがあると思います。
どんな勉強や生活にもつらさはあるでしょうし、自分の立ち位置が見えないときもあります。そのことをやっていて良かったと思えるのは、山でいえばかなり登ってから、いえ、山頂に辿りついてから、あるいはひょっとしたら山をおりてからかもしれません。

山頂までの行程では、平坦な道もあるし急な斜面、でこぼこの道もあります。そして、両端に樹木が生い茂り自分の進む足元しか見えず、回りの景色がわからないところもあります。そのときは、自分の足元を一つずつ確認しながら苦しいながらもその道を一歩一歩進んでいくしかありません。頂上は見えなくとも足を前に出すことを繰り返す。つらい時や苦しいときは、まさに、その行為のみに集中するということです。その苦しいときがすぎたら、あとの景色はまた違うものになっていきます。
そういった道のりを、一つずつつみ重ねながら自分の目標に近づいていく。

やりがいのあること、その味わいは一部分のみの事象だけではなく全行程のなかにあります。　山歩きは、自然の躍動を感じ楽しいなかにも苦しさやきつさがあります。自分が疲れたらそこで少し休めばいいのですが、つらさを感じるたびにすぐ山を下りてしまっていては山の本当の楽しさを感じることはできません。人生も同じだと思います。
困難にぶつかるたびに、そこから後ずさりしていては生きるということの本来の楽しさを味わうことはできません。

もちろん山では、天候による危険があるときは先に行きたくても引き返すのが常道です。自分ではどうしようもない環境におかれた場合を除いては、時間はかかるかもしれないけれど落ち着いて少しずつ進んでいきましょう。

そして、山から回りの景色をみるのと同じく、自分の手の届く目標に到達したらどんな感じがするか味わってみてほしいと思います。

本日入学をされた皆さんは、一人ひとり違う環境のなか、声に出せない自分の思いもあったことでしょう。しかし、勇気を出して佐賀星生学園の第１期生として入学をされました。これから始まる学校生活は、今まで経験したことのない新しい形の学校生活です。ここでは、本来の自分らしさを取り戻して、自分の持ち味を生かした学校生活を楽しんでください。主役はあなたたちです。教職員は、皆さんのよさを引き出す味付け役です。第１期生として、星生にどんな色をつけてくれるのかとても楽しみにしています。

最後になりましたが、今日まで、お子様の成長を支えてこられました保護者の皆様には
これまで様々なご労苦を乗り越えられ、本日を迎えられたことと思います。
教職員一同、お子様のご入学を心よりお喜び申しあげます。

そして、お子様がよりよい学校生活を送ることができるよう学校と家庭がそれぞれの役割を果たしながら、より密接な連携をしていきたいと考えています。
本学園の、教育活動の推進に一層のご理解とご協力をお願い申し上げまして式辞とさせていただきます。

平成 23 年 4 月 14 日

佐賀星生学園
校長　加藤雅世子